

通訳入門



杉森 元 著

通訳とは何か

できそうでできない「通訳」の正体

図解「通訳の仕組」

これが通訳者の脳内だ！

DVD による練習

こうやってやる！具体的方練習法

まえがき

本小冊子は、通訳を初めて行う学習者のために、通訳の原理を解説し、練習法を提示する目的で書かれている。

通訳案内士試験（観光庁が管轄する国家試験であり、語学に関する唯一の国家資格『通訳案内士』の資格を付与する目的で毎年1回行われる試験）の二次口述試験においては、平成25年度より「逐次通訳課題」が問われることとなった。これは、90字程度の日本語を試験官が読み上げ、この内容を受験者が外国語に通訳する、というものである。この課題は一見易しいように見えて実は非常に難しく、受験者の悩みの種となっている。

PEP 英語学校では、この対策教材として『番勝負！シリーズ』をはじめとする斬新なDVD教材を開発しリリースしている。教材のメディアとしてDVD動画を選んだ理由は、「通訳」という行為は、①音声で行う（音声要件）、②即時に行う（時間要件）、という2つの要件がある点が最大のポイントであるところ、この点をトレーニングするための音声による出題と、動画自動タイマーによるタイムキーピングの両方をDVD動画なら効率的に実現できるからである。本冊子は、こうしたDVD問題集の利用ガイドブックという位置付けである。

通訳案内士試験二次口述における「逐次通訳」の出題は、史上初めて「通訳せよ」という課題が試験で問われた画期的出来事である。それゆえ、大多数の学習者にとって「通訳する」というのは初めての言語活動であり、この課題が難しいと思われるゆえんであるが、PEP 英語学校は、この通訳案内士試験二次口述で問われる「逐次通訳課題」を、一般の英語学習者にとっての「通訳入門編」と位置付けている。つまり、本冊子は「通訳案内士試験対策教材」に付属しているが、それは通訳案内士試験の「逐次通訳課題」が、多くの英語学習者にとって「初めての通訳」であることが多いからであり、本冊子は通訳案内士試験受験者に限定されず、広く「通訳初心者」にとって有用であるということである。

なお、通訳理論についてはDVDブック『逐次通訳七番勝負！』（PEP 英語学校）により詳しい解説を載せているので、ぜひ参照されたい。

PEP 英語学校は、楽しい英語学習を通じた「自己実現」を応援する、という立場から、英語の資格試験突破と、それに続く「通訳技術」の習得をプロモートしている。日本で英語を学ぶ方々は、一般に英検、TOEIC、そして通訳案内士試験、といった資格試験をインセンティブとしながらレベルアップしていくが、これらの資格を制覇した先に、いよいよ「プロレベルへの入り口」として「通訳技術」がある。通訳ができるようになると「訳してくれ」という依頼、すなわち英語を用いた仕事がこなせるようになる。また、必ずしもプロを目指さない人にとっても、通訳という行為を通して、言語センスが敏感になり、多くの知識や人脈が得られるなど、通訳技術を学習することのメリットは大きい。従前、一部の特殊な人々の「独占物」であった通訳技術が、PEP 英語学校の教材及び講座等を通じて、一般のものとなり、各学習者の「自己実現」がなされることを期待する。

杉森 元

通訳とは何か

—できそうでできない「通訳」のひみつ—

通訳はプロのサービス

まえがきで述べたように、新形式の通訳案内士試験二次口述では「逐次通訳」が課される。日本には、英語の試験が多数あるが、この中で「通訳せよ」と要求される試験は従前はほぼ皆無であった。おかしな話だが、「通訳」案内士試験、と銘打った試験でさえも、実はこれまで「通訳」の技術が問われたことはなかった。つまり大多数の英語学習者にとって「通訳する」という言語活動は初体験なのである。そこで、受験者はまず「通訳するとは何をすることか」ということから確認する必要がある。

平均的な外国語学習者は当該外国語を学ぶ際、たいがい母国語へ、あるいは母国語から、「訳す」ということから始める。多くの方々は、これまで「英文和訳」と「和文英訳」をたくさんやってきたことであろう。これはこれで別に英語の学習方法としては間違っていない。

問題は、英語学習者が一定のレベルに達した後、今回のように「通訳せよ」という課題を与えられた際に、従前やってきた「自分の学習目的で訳す」という行為と「聞き手のために通訳する」という行為とを混同してしまい、「ああ、訳ならこれまでさんざんやってきたよ」と思い込んでしまうことである。そして、いざその「通訳」をやってみようとする、その難しさに愕然とする、ということになるのである。

両者は何が違うか。もちろん、技術論的にも大きく違うのだが（後述する）、学習に入る前に、心構えの問題として、両者の相違点をまずハッキリさせておく必要がある。それは、「外国語学習目的の訳」は、初学者が「自分の理解のため」（外国語がわからないのは他人ではなく自分）あるいは、「先生に自分の語学力を試験において審査してもらうため」（自分よりも語学力が高い人に見せるため）に訳す行為であるのに対し、「通訳者としての訳」は、「お客さんである聞き手のため」（外国語がわからないのは他人であり、訳を示す相手は自分より語学力が低い人）に訳す行為である、ということである。

つまり、自分の学習目的での訳は、お金を払って学ばせてもらう学生としての行為であるのに対し、通訳者としての訳は、お金をもらって聞き手のために行うプロのサービスである、ということである。だから「通訳せよ」と言われたら、「学生」ではなく「プロ」の心構えを持つべきであり、発想の転換が必要なのである。

しかし、今回やろうとしていることは、通訳案内士「試験」の突破であるので、受験者には依然として「学生」としての身分もある。このように「通訳能力を試験される」ということは「もはや学生ではない、ということをして学生として審査される」という矛盾した立場に立つことなので、ミスリーディングなのである。この点を十分意識し、たとえ試験といえども、受験者は通訳の本質に立つことを忘れないことが大切である。

意識すべし

初めてプロの通訳を聞くと「自分がこれまで学校や試験でやらされた厳密な訳に比べて、ずいぶんくだけた訳だなあ」という感想を持たれる方が多いであろう。そのとおり。和文英訳や英文和訳は直訳的な傾向があったが、これに対して通訳は意識的になる。これはなぜであろうか。

それは、先述のように、通訳の本質は「自己の語学力アピールのためではなく、外国語を解さない他人へのサービスのために訳す」ことだからである。訳して「あげる」のだから、「意味」を訳してやらなければならない。当然である。

そしてこの「意識」は、訳す側の通訳者にとっても「通訳メカニズム」と一致していて好都合なのである。この「通訳メカニズム」とは、まえがきで述べた「音声要件」（通訳は音声で行わなければならない）と「時間要件」（通訳は即時に行わなければならない）という必要性の中から生まれた「訳し方」のことである。

通訳メカニズムと技術論

（１）総論

では、その「訳し方」とは具体的にどのような方法であるか。

通訳という行為のメカニズムは、通訳者が情報を「①聴解⇒②記憶⇒③翻訳⇒④表現」の順番で処理することである、と分析することができる。そして、この４段階の行為は、前段階が成立しないと、後続の段階が成立しない、という関係にある。たとえば、「聴解」（原情報の聴き取り）に失敗すれば、記憶する対象そのものが得られないわけだから、次の「記憶」という行為は不可能となる。聴解ができて、記憶に失敗して原情報を忘れてしまった場合は、訳す対象が失われてしまったのだから、次の段階である「翻訳」はやはり不可能である。

そうだとすれば、各行為は早い段階の行為ほど重要（④より③、③より②、②より①が大切）である、ということが言える。この点も、学習者にとってはミスリーディングな部分である。なぜなら、初心者（これまで通訳を「聞く側」であった人）は、「通訳」といえば④表現のことばかり見てきているので、「通訳をうまくやる」ためには、④あるいは③をうまくやるのが重要だと思いがちだからである。

しかし、実際にプロが大切に、かつ苦勞しているのは目に見えない①②の部分なのである。よって、これから「通訳をする」側になろうとする者は、いきなり③④をうまくやろうとするのではなく、まず①と②にフォーカスして訓練する必要があるのである。

（２）聴くべし

すると、まず最も大切なのは①の「聴解」であるということになる。聴解とは音声で言語情報を受け取ることであり、先述の「音声要件」と深く関連している。通訳において、この聴解こそが最も大切で、最も難しいのである。

なぜそれほど難しいのか。それは「通訳というのは、きわめて非日常的かつ不自然な言語活動であり、これを行うためには非日常的なまでに高い集中力を必要とする」からである。

通訳という行為が非日常的かつ不自然な言語活動であるとは、どういう意味か。ここで注意すべきは、「通訳をする」ということと「二か国語を使う」ということの差異である。前者は不自然な言語活動であるのに対し、後者は不自然ではない。両者はどこが異なるか。

通常、我々はどの言語を用いようと、その言語で自分の頭の中にある発想を表現する。しかし、通訳という行為は、自分の発想を表現するのではない。「他人の」発想を表現するのである。通訳者は、本来「自分の頭の中に存在しない情報」をアウトプットするのである。しかし、人間は自分の頭の中に存在しない情報を言語化することはできない。だから通訳をするためには、その情報を「まず頭に入れる」ことが大切なのである。先述した「通訳をするために最も大切なのは原情報の聴解である」というのは、このような意味である。

この場合の「頭に入れる」という行為は、単に「今聞いたことをリピートできる」というレベルでは足りない。なぜなら、通訳という行為では、まず聞き手として原話者の話を聴いた後、次の瞬間には自分が話者にならなければならない。つまり原話者と同じレベルまで内容を理解することが求められるのである。

このように、通訳目的で話を聴くときに必要な集中力は、原話者に「なる」レベルの理解を得られるだけの集中力である。しかも、通訳の場合は「時間要件」があるから、一瞬でこれを行わなければならない。このレベルの集中力をもって「聴く」という行為は、日常生活ではほぼ皆無である。それゆえ、「通訳目的で聴く」という非日常行為ができるようになるためには、意識的訓練が必要となる。

(3) 憶えるべし

(a) リテンションの意義

原情報の聴解ができたなら、次はこれを記憶しなければならない。前述のように、記憶しなければ、次の段階である「訳す」行為は不可能である。通訳者は、訳を口から吐き出し終わるまでは、原情報を憶えておく必要がある。この「原情報の保持」のことを「リテンション」(retention)という。

聴解のところで触れたように、通訳とは他人の発想を話すことなので、まず、話すべき内容を通訳者の頭に入れることが絶対不可欠である。リテンションは、聴解と一体となって、通訳における最も重要なプロセスを構成している。

では、具体的にリテンションはどうやればいいのか。まず、リテンションの本質を明らかにすることから始めたい。

(b) リテンションの対象は「意味」

「通訳するならば、まず原情報を憶えよ」(リテンションせよ)、と課題を与えられた際、間違っただけではないのは、通訳におけるリテンションとは、テープレコーダーのように音

声をそのまま頭にコピーすることではない、ということである。テープレコーダーは、スピーチを正確に記録するが、意味は把握しない。これは人間の言語活動の仕組とは異なる。

(c) 意味とは「中立情報」のこと

この「意味」とは、別の言葉で言えば「言語によって異なる中立情報」である。人は頭の中に「中立情報」を持っており、それを「言語」で表現する。言語を1つしか持っていない者は、この「中立情報」から言語の線が1本出ているだけだが、2カ国語を持っている者は、この「中立情報」から言語の線が2本出ている、ということである。

通訳におけるリテンションをする際には、音声で与えられた情報を単にテープレコーダーのように頭にコピーするのではなく、いったん「中立情報」に翻訳して、その「中立情報」を記憶する、という方法が正しい。では、その「中立情報」とはどのようなもので、また「言語音声」から「中立情報」への「翻訳」とはどのようにすればよいのか、が問題となる。

(d) 中立情報とは「映像」「論理」「キーワード」など

「中立情報」の代表としては「映像」がある。“I like dogs.”と話者が話すのを聞いて、話者が犬を撫でている場面を思い浮かべるのがその例である。つまり、中立情報への変換の方法としては「映像化する」ということが挙げられる。

しかし、我々が対処するスピーチはこのように単純なものばかりではなく、抽象的概念や専門用語が含まれることが多い。このように「映像」になりにくいものは、どうすればよいのだろうか。

そもそも「中立情報」とは「言語によって異なるもの」である。その代表格が「映像」であるのだが「言語によって異なるもの」は他にもある。その中で最も重要なものが「論理」である。抽象的な概念を他人に伝え、納得させるために用いられるのが論理であり、論理は言語によって異なる。論理的な話は何語で言っても人々の納得を得られるのに対し、非論理的な話は得られない。つまり「論理」は「中立情報」であるということである。

よって、通訳をする際は、原スピーチの中に「論理関係」があるかどうかを分析・抽出し、それを記憶することが大切、という結論になる。このように通訳においては、原スピーチをいったん「論理関係」に因数分解し、それをリテンションし、その論理を別の言語で再生する、という仕組を用いる。

次に、第3の「中立情報」として、「固有名詞」や「専門用語」などの「キーワード」がある。固有名詞は言語によって異なる。専門用語は訳されることもあるが、その原語と訳語はほぼ一対一の関係にあることが多く、通訳する場合も「あらかじめ知っている訳語をそのまま言う」ことで足りるし、そうすべきである。つまり、キーワードは、そのままリテンションすべき情報として、「中立情報」であるといえるのである。

以上のように、リテンションの際は、原情報を映像、論理関係、キーワード等に分析・抽出した上でこれを記憶するのが、理にかなった方法である。

さて、前述のように、通訳者は訳を口から吐き出し終わるまでは、訳す対象である原情報を手元にとどめておく必要がある。その中心となるのがリテンションであるが、情報を保持する方法としてはもう一つ「メモ」がある。通訳案内士試験でもメモ取りが許されている。そこで次に、このメモの本質について触れる。

(4) ノートテイキング

(a) メモ取りの意義

通訳の初心者に対して「今から私が言うことを通訳してください。メモを取っていただいても結構です」とまさにガイド試験と同じ課題を与え、その後で「どうでしたか」と感想を訊くと、必ず返ってくる答として「メモが追いつきません。こんなにたくさんのかことを書き取ることはできません」というのがある。

しかし、この感想は実は的を外れている。与えた課題は「話を通訳せよ」であって「話を書き取れ」ではない。メモについては「取っていただいても結構です」と言ったのであるから、目的である「通訳」さえできれば、メモは別に取っても取らなくてもどちらでもよいわけである。

通訳という行為は、コンピューターの情報処理に例えられる。通訳者が原情報を聴き取り、リテンションするのが脳というコンピューターへの「入力」(インプット)である。脳というコンピューターが、原情報を別の言語に変換するのが「処理」(プロセス)である。そして表現するのが「出力」(アウトプット)である。このように、訳すためには原情報を脳というプロセッサに入力する必要がある。紙の上にくら原情報を書き留めても、紙は「訳す」作業はできないのであるから、結局訳文を作ることはできない。通訳において「ノートを取る」という行為の位置づけは、あくまで「記憶(リテンション)の補助」である。ノートを取ることにメリットがある場合だけ取り、リテンションだけで間に合う場合はメモを取る必要はない(メモなしで済ます場合も実際によくある)。

(b) 何を書き留めるか

では、リテンションの補助をするためにノートを取るとして、どのような事項を書き留めればよいのか。

実は「補助のために書く」ものには2種類ある。1つめは、情報の種類により、頭で覚えるよりもメモに取ることの方が適切なものがあるので、それを書き留める、という場合である。2つめは、情報保持機能以外に、書くことによって通訳者自身の「理解」を助ける機能が期待できるものである。

前者を具体的に言うと、数字や固有名詞を書き留める、という場合がこれにあたる。数字や固有名詞は「その場限り」で「汎用性がない」情報であることが多く、覚えにくい、その一方、個々のスピーチにおいては重要な情報であることがしばしばである。また先述のように、数字や固有名詞は「原語と訳語が必ず1対1」の関係にある情報であるから、訳すためには、書き留めておきさえすれば、後は「知っている訳語をそのまま言うだけ」

で訳になるので、無理して頭で覚えるよりも、書いてしまう方が合理的である。

後者は、話の筋や論理関係を書き取ることである。この場合は、矢印等の記号を多用することになる。たとえば、スピーチの中に「原因」と「結果」に相当する情報があつた場合、「原因」から「結果」に向けて矢印を書くような場合である。通訳者は、原情報を聴解する際にこうした作業をすることにより、話の筋を追いかけ、自身の理解を助けることができる。また、通訳をデリバリーする際に、こうして作ったメモが記憶喚起及び訳文を作ること（日英通訳なら英語の構文を作ること）の助けとなる。

(c) どう書き留めるか

以上は、メモに取る「対象」の話であるが、次にその「方法」はどのようなものか。

先述のように、通訳で最も重要で神経を使うのが「聴き取り」である。メモはまさにこの聴いている最中に取るものであるから、なるべく「聴き取り」のために払うべき注意力を削がないものにしたい、という要請がある。実際、通訳初心者の感想として「メモが追いつきません」に次いで多いのが「一生懸命メモを取っていたら、肝心のリテンションの方が真っ白になってしまい、話を完全に忘れてしまいました。しかも、思い出そうとして自分のメモを見ても、自分の文字が乱暴すぎて読めず、結局役に立ちませんでした（笑）」である。

また、メモについては、書く作業によって集中力を削がれないようにしたい、という要請の他に、音声は手の動きよりも速く流れるから、原情報に遅れずについていくために、なるべく速く書けるものにしたい、という要請もある。

この2つの要請から導かれるのは「メモはグラフィックに書くべし」という答である。言語の「音声」を「文字」にして書くのではなく、原情報の「意味」を「絵」にして書くのである。なぜグラフィックなメモがよいか。理由は2つある。

まず1つめは、絵や記号は、文字よりも少ない画数で多くの情報を表せるからである。たとえば「絶対に拒絶する」という言葉を文字で書き取ると大変だが、記号で書いたら、バカでかい「X」を紙の真ん中に書きなぐっておけば足りる。つまり、絵や記号は文字よりも速く楽に書けるのである。

次に2つめは、グラフィックなメモは、リテンションのところでは先述した「中立情報」と一致し、ここからは、通訳者の持っている複数の言語のうちいずれでも導き出せるからである。たとえば「X」からは、「絶対に拒絶する」も導けるし、“The answer is a flat no!”も導ける。つまり、文字を訳すよりも、絵を訳す方がやり易いのである。

(5) 訳して話す

以上で、通訳のプロセスである聴解⇒記憶⇒翻訳⇒表現の4段階のうち、半分が終わったことになる。しかし実は、通訳の仕事量からいうと、記憶までが終われば、通訳はもはや80%が終わったといってもよい。翻訳・表現と言っても、これは頭の中にリテンションの終わった「情報」を別の言語で表現するだけのことにすぎず、ここから先は通常の言語

活動（自分の言いたいこと言う）と同じだからである。日英通訳ならば、日本語を聴解・記憶できれば、仕事の 80%は終了であり、後の翻訳・表現は英語が話せさえすればそれほど困難なくできるのである。

しかし、通訳に対する「評価」はまさにこの「翻訳・表現」で決まる。通訳者がいくら「聴解・記憶」で苦勞していても、お客さんにはそのような部分は見えないし、評価の対象にならない。また、日本語と英語の間の通訳を学ぶ者の大多数は、日本語を母国語とする者であることが現実であり、やはり外国語を話すことは母国語を話すことよりもはるかに難しいのは確かである。よって、結論としては「翻訳・表現」もまた大切である、ということになる。

では、どうすればよいか、であるが、これはもはや通訳の技術論を超えるであろう。要するに「外国語である英語を上手に話すにはどうすればよいか」というのが問である。これは、これまで英語学習のために続けてきた努力を継続することである、というのが唯一の答であろう（ここには、日本事象を説明するための語彙の習得も含まれる）。

ただ、1つアドバイスがあるとすれば、それは「なるべくシンプルな英語が良い」ということである。シンプル英語にはメリットが2つある。1つは、ミスが起きにくい、ということである。つまり話しやすい、ということである。2つめは、聞き手にやさしい、ということである。つまり理解しやすい、ということである。

先述の通り、通訳は「お客さん」のためのサービスであり、通訳を「評価」するのは、その「お客さん」である。そうだとすれば、専門的見地から厳密な訳よりも、わかりやすい訳の方が評価は高くなるのは当然である。通訳に対する「評価」は、専門家の見地から行われるのではなく、素人の見地から行われるのである。そうであるから「自信を持って堂々と話す」などということも、意外に大切である。もっと言えば、ハツタリをきかすことも有効である。通訳者は「プロである私が言っていることこそが正解です」のように図々しくふんぞり返っているぐらいでちょうど良い。実際、「訳」に「絶対解」はないのであるから、よほど明らかな場合でない限り、「それはウソだ」と証明することは難しい。

また、試験の課題であるという点について言うならば、試験は「減点法」で行われるものなので、「点を稼ぐ」よりも、「とにかくミスを減らす」という守りの姿勢の方が得策である。

そして最後に、通訳案内士試験二次口述で求められる英語力について触れておく。英語力のレベルについては、一次試験をパスできた者ならば、とりあえず必要なレベルをクリアしている、と考えてよい。つまり、逐次通訳課題に必要な「英語力」は、大抵の受験者に既に備わっているもので、自信を持ってよい、ということである。受験者がフォーカスすべきは、通訳に固有の技術である「聴解・記憶」の部分であることを重ねて強調しておく。

図解「通訳の仕組」

—これが通訳者の脳内だ！—

日英通訳の場合



DVDによる練習

—こうやってやる！具体的方練習法—

以上で、通訳という行為がどういう行為なのか、なぜ難しいのか、は明らかになったであろう。では、その通訳という行為ができるようになるためには、具体的にどのような練習をすればよいのかについて説明する。

前述の通訳という行為の各段階のうち、初心者が困難を感じる部分というのは、ほぼ共通している。それは前頁の三角形の図の左半分、すなわち原文の聴き取りから三角形の頂点、すなわちリテンションまでのプロセスである。先述の通り、通訳で難しいのは「聴解・記憶」の部分であり、「翻訳・表現」の部分は、一般に思われているほどは難しくない。通訳の仕事は、リテンションが終われば、80%終了したといえる。よって、通訳ができるようになるためにはリテンションを練習すればよい。

ただ、その練習においては、原語の情報を聞いた後、「はい、憶えました（リテンションしました）」と言って終わってしまうと、本当に「通訳に必要なレベルでの」リテンションができていないか、が確認できない。そこで、行うのが「リプロダクション」という訓練法である。

リプロダクションとは、聴き取った原情報を「再現」することである。日本語で原情報を聞いたなら、その内容を日本語で再生することである。つまりリプロダクションとは、通訳プロセスの後半部分である「翻訳」の部分を省き、日本語の聴解⇒記憶⇒日本語で再生、という過程を経るものである。再生ができれば、リテンションができていたことが確認できたことになる。

ここで注意すべき点は、リプロダクションはリピートとは違う、ということである。リピートは、いわばテープレコーダーのように、音声としてインプットしたものを音声としてアウトプットすることである。これに対してリプロダクションとは、「情報」としてインプットしたものを「情報」としてアウトプットすることである。よって、再生の際に用いる言葉は、必ずしも同一の単語や構文を使う必要なく、「情報」として同じであればよい。むしろ、あえて違う表現を用いるぐらいでもよい（これは「パラフレーズ」という通訳の訓練法の1つである）。

具体的には、本書付属のDVDで問題演習をするときに、通訳に困難を感じたら、リプロダクションに切り替えてみるとよい。出演者が原文の読み上げを終えたら、次のポーズの中で通訳の代わりに、まずリプロダクションを試してみるのである。これを数回繰り返すと、本試験の課題ぐらいの量なら、すっかり内容が頭に入ってしまったはずである。

課題が頭に入ってしまったら、今度は通訳を試みるとよい。やってみるとわかるが、意外と簡単に通訳できるはずである。これは、通訳をする上でリテンションがいかに大事か、ということを証明している。そして、先述の「頭の中に既にあることならば、それを

英語で表現すること自体は思ったほど難しくない」旨が実感できるであろう。

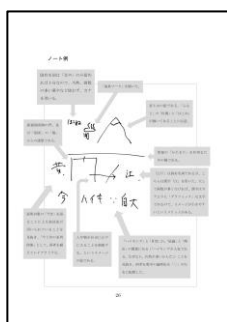
もちろん、試験本番では数回リプロダクションをした上で通訳をすることは許されない。だから、目標は「一発で」リテンションできるようにすることである。そのためには、やはり「高度の集中力が必要」ということに帰着するのである。

以上で通訳理論編を終わる。これで学習のターゲットが把握できたであろう。次は DVD による演習に入っていただきたい。なお、くれぐれも DVD 演習前に「スクリプト」を見ないようにしていただきたい。予備知識なく「聴解・記憶」できる集中力を養うことが、演習の最大の目的だからである。

YouTube 動画による無料講義のご案内

以上の通訳理論につき、分かりやすい解説講義が YouTube チャンネルにアップされている。本テキスト、及び『逐次通訳七番勝負！』のフルバージョンテキストと共に閲覧していただければ、より容易に理解が深まるであろう。YouTube のホームページから「PEPEnglishSchool」のチャンネル名で検索できる。

	
「通訳の理論」	「逐次通訳各論」
新形式初年度の筆記試験直後に行った緊急講義。新課題「逐次通訳」のコツは「リテンション」にあることを杉森が熱く解説します。	筆記試験直後に毎年恒例で行われる「解答会&二次口述セミナー」から。配布資料も HP から PDF で DL 可。「分かりやすい！」と大絶賛されました。



『逐次通訳七番勝負！』のフルバージョンテキストと、その中に掲載されているノート例。
『逐次通訳七番勝負！』は、演習用 DVD 付で定価 2,800 円。購入申し込みは HP オンラインストアから。 www.pep-eigo.com

最後に

レッスン希望の方へ

逐次通訳番勝負！シリーズは、新形式の通訳案内士試験で問われるようになった「逐次通訳」を正式の理論に則り、独学で学べるように工夫した究極の教材です。

ただ、それでもやはり、通訳技術は一種の「職人芸」なので、そのマスターのためには個人レッスンを受けることが非常に有効です。

従前、通訳技術の教授はプロ志望の一部の人が行く通訳学校でしか行われていませんでした。しかし、PEP 英語学校では、無料テレビ電話 Skype を用いたレッスンにより、学習者の皆さんの時間的、地理的、経済的ハンディを最小化して、全ての人が通訳レッスンを受けることを可能にしています。

レッスンのスケジュールは、相談で都合の良い日時を決めることができます。ただ、毎年一次試験終了後、二次試験の直前までは混み合うことが多いので、早めの段階から受講しておくことをお勧めします。

レッスン担当は、元サイマル専属同時通訳者の杉森元です。詳細・受講申込についてはホームページをご覧ください。

もっと練習したい方へ

逐次通訳番勝負！シリーズは、PEP 英語学校が開発したオリジナル教材で、本 DVD ブックの他にも『十番勝負』から『一番勝負』まで、たくさんの問題が準備されています。

通訳が上達するには、理論やメソッドが正しいことがもちろん大切ですが、やはり絶対的な「練習量」の確保も必要です。しかし、通訳の練習ができる場は限られています。通訳案内士試験対策を行っている各種の学校の講座に参加するのは、経済的、時間的、地理的に負担が大きいことがしばしばであり、十分な練習量の確保は容易ではありません。

この点、PEP の教材を用いると、逐次通訳 1 問当たり 200 円程度で自習することができます。これなら、誰でもたっぷり練習することができます。ぜひご利用ください。サンプルが PEP 英語学校ホームページのオンラインストアにあります。購入もここからできます。

合格の「次」を考えている方へ

まえがきにも書いた通り、通訳技術の学習は、単に通訳案内士試験に合格するためだけにやるものではありません。通訳ができるようになると、英語で仕事ができるようになります。また、通訳を通して多くの知識や人間関係を得ることができます。

日本で英語の勉強をする学習者にとって、通訳案内士試験に合格するのは、ひとつの目標です。しかし、資格試験合格は、ゴールではありません。実際、「プロの通訳者レベル」と言えるためには、通訳案内士試験の逐次通訳課題がこなせるだけでは、まだ足りません。

この後習得すべき技術としては、同時通訳やサイトトランスレーションなどがあります。合格後は、ぜひ本格的な通訳技術の学習をしてみてください。

これらの技術の教授は、従前、プロ志望者だけが行く専門の学校でしか行われていませんでした。しかし、PEP 英語学校は「楽しい学習による自己実現」の理念の下、必ずしもプロの通訳者志望者でなくても、全ての学習者が通訳技術を楽しく効率的に学ぶためのプログラムとして「会議通訳小教室」を準備しています。ご興味がある方は、どうぞホームページからお問い合わせください。



Self-realization through Learning

 **PEP英語学校**
We are full of PEP!

校長 杉森 元

〔著者紹介〕

杉森 元 Hajime Sugimori

福岡県出身。大学で歴史学を専攻し社会科教員免許を取得。大手塗料会社海外営業部勤務の後、通訳案内士試験予備校講師、英検 1 級講師、代々木ゼミナール英語科講師、駿台予備学校英語科講師など英語教育に従事。その後、サイマル・インターナショナル専属同時通訳者となり、サイマル・アカデミー通訳者養成コースの講師も担当した。現在、PEP 英語学校校長。通訳案内士試験準備講座と会議通訳小教室の講師を務める。「楽しい学習による自己実現」がモットー。

通訳案内士試験関連著書に『モデル・プレゼンテーション集』『通訳案内士試験二次口述過去問詳解』『逐次通訳七番勝負!』『コンピューター・フレンドリー日本事象英単語帳』などがある。



著者近影

通訳入門

著者 杉森 元

発行者 PEP 英語学校

〒167-0023

東京都杉並区上井草 2-30-15 第二ケヤキビル 102 号

Tel: 03-5938-7777

HP: <http://www.pep-eigo.com>

Mail: info@pep-eigo.com

乱丁・落丁はお取替えます。



www.pep-eigo.com

無断複製を禁止します。